

# 高等学校における卒業論文に関わる指導方法の改善と教員の指導力向上を目指した研究

竹 林 和 彦 (渋谷教育学園渋谷中学・高等学校)

## 1. はじめに

### (1) 問題の所在

高等学校において「卒業論文」(卒業研究)を課す学校が多くなってきている<sup>(1)</sup>。「卒業論文」は現学習指導要領での探求型学習の一環として、また、「総合的な学習の時間」(総合学習)での取り組みとして実施されている。高校生たちは「卒業論文」に1年から2年ほどの時間を費やしている。「卒業論文」を書く目的としては、①レポート・論文が書けるようになること、②執筆活動を通して、社会に通じる基本能力<sup>(2)</sup>を磨くこと、③生きていく上で求められる探究心や知的好奇心の涵養があげられる。

筆者の勤務校でも、「自調自考論文」の名称で「卒業論文」に相当するものが総合学習の時間で扱われている。筆者は「自調自考論文」カリキュラムの責任者として6年間論文指導に携わっている。その間に、「自調自考論文」を書いたことで進路が決定し、そのまま大学でも研究を続けていることを聞いた。また、高校時代に書いた論文で得たスキルがあるので、大学で課されるレポートや論文を書くのに困らないといった感想を得た。「自調自考論文」を書き大学に進学した卒業生全員に調査を行ってはいないので断定はできないが、このように一定の成果が見られる。しかし、一方で、「卒業論文」を指導している教員から、高校生への論文指導の難しさや教員自身の専門外のテーマに対する対応の仕方の不安、さらに、教員の論文指導力の向上についてなどの意見を聞く。それらの背景には、高校生に対する論文の指導法や教育課程が存在せず、個々の学校、個々の教

員が手探りの状態で指導を行っている現状がある。

今後、「卒業論文」を執筆する高校生にも、それを指導する教員にも満足いく探求型学習にするには、卒業論文に関わる効果的な指導方法や教員の指導力向上を目指した議論を行う必要がある。そこで本研究では、先に示した高等学校での「卒業論文」の目的を達成できるような指導方法の改善と教員の指導力向上を目指した検討を行う。

### (2) 研究の目的と方法

#### ①研究の目的

探求型学習を中等教育で経験し、かつ、高等教育で自分の専門分野はともかく、一般的な研究の手法や論文の作成方法を学んだ高等学校の教員はそれほど多くはない。筆者も論文作成のスキルは学部学生の時ではなく、大学院に入って主に身につけたものである。さらに、高等学校の現場では、教員が教材研究や生徒指導に多くの時間を割かれ、研究活動を日常的に行っていない場合が多い。また、大学で卒業論文が必須ではなく、論文を書いた経験がない教員や、大学卒業後長期間論文執筆に携わっていない教員など日常的に論文を書くことから遠ざかっている教員も多い。お互いの抱える指導上の問題点を議論し解決する時間も取れず、まして、他校とその問題を共有し解決しようとする動きはほとんど見られない<sup>(3)</sup>。そこで、本研究の目的は、「卒業論文」を担当する教員が抱える指導上の問題点を整理し、その改善策を議論し、さらに指導教員の効果的なスキルアップの方法を検討し提案することである。

#### ②研究の方法

現高等学校学習指導要領の解説では探求的な学習における生徒の学習の姿が、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の一連の学習活動として示されている。現指導要領が示されて以来、高校生（中等教育）向けの論文の書き方やワークが多く出版されている。それらの論文の書き方やワークで示されている指導方法（論文の書き方）でも、筆者が勤務する渋谷教育学園渋谷中学高等学校でも、探求的な学習の基本的なプロセスは上記の一連の流れをなぞる。この4つのプロセスに⑤評価の項目を加え、アンケート調査を行い、どのプロセスが最も改善を要するのか、「卒業論文」を指導する教員が抱える指導上の問題点を整理した。その結果をもとに、すでに「卒業論文」を導入している学校、今年度から導入している学校、導入していない学校の教員で研究会を作り、問題点の改善策と指導教員の効果的な指導力向上の方法を検討した。

アンケートは渋谷教育学園渋谷中学高等学校で平成24・25年度に「自調自考論文」を担当した教員から20名（大学院卒10名・学部卒10名）を選び実施した。指導教員の効果的な指導力向上の方法を検討するために、修士論文執筆の経験と指導に難しさを感じた探求的な学習のプロセスの関係を調査した。修士論文執筆の有無に着目した理由は、筆者の経験と本研究のために立ち上げた研究会において、修士論文を書いた時に論文の書き方を最も強く意識したという意見が多かったためである。なお、アンケート項目は渋谷中学高等学校での指導しているカリキュラムに沿い、①課題の設定は「テーマ設定」、②情報の収集は「先行研究収集」、③整理・分析は「研究手法」「分析方法」、④まとめ・表現は「論文執筆」「論文添削」とし、⑤評価は「評価・優秀論文の選考」という項目に変更して行った。

## 2. 「卒業論文」を指導する教員が抱える指導上の問題点

### (1) アンケート結果

#### ①論文指導上困難を感じている点

図1に示したように、教員が論文の指導上困難を感じているプロセスとして、課題の設定の「テーマ設定」と整理・分析の「研究手法」「分析方法」が多い。6割以上の教員がそこに難しさを感じている。他方、まとめ・表現の「論文執筆」「論文添削」には2割強の教員が困難を感じているだけである。

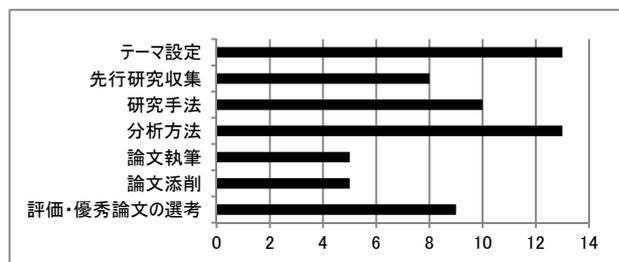


図1 論文指導上難しさを感じている点（全体）

教員の論文執筆経験と指導上の困難を感じる点の関係を示したものが図2・3である。複数回答でアンケートを行った結果、修士論文執筆経験がある教員が感じた困難な項目は延べ24に対し、執筆経験がない教員は延べ39項目になった。困難を感じた項目を見ると、執筆経験がある教員は「テーマ設定」が最も多く、修士論文執筆経験がない教員は「研究手法」「分析方法」に最も困難を感じている。また、「テーマ設定」は両者ともに困難を感じている教員が多い一方、最も差が生じているのは整理・分析の「研究手法」「分析方法」である。さらに、まとめ・表現の「論文執筆」「論文添削」では、どちらかというとなら執筆経験者は「論文執筆」に困難を感じ、執筆経験未経験者は「論文添削」の方がより困難を感じている。しかし、評価の「評価・優秀論文の選考」については、両者に大きな差は認められない。

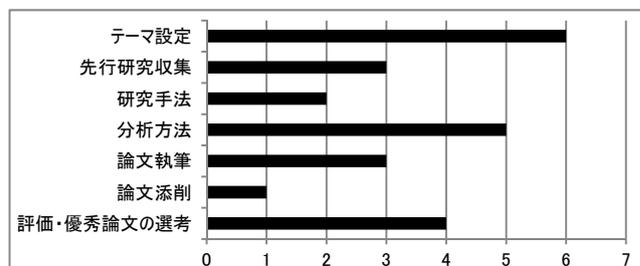


図2 論文指導上難しさを感じている点（修論執筆経験者）

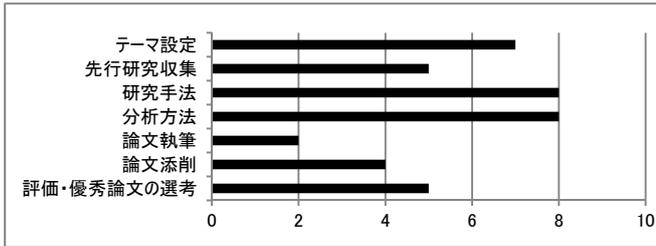


図3 論文指導上難しさを感じている点（修論執筆未経験者）

②論文指導上工夫している点

自由記述方式で論文指導上工夫している点を、論文指導上困難を感じている点と同じ項目に分類し、整理したものが図4・5である。修論執筆経験がある教員が指導上工夫している項目は延べ12に対し、修論執筆経験がない教員は延べ6項目と差がついている。また、修論執筆経験がある教員は、研究プロセスの前半に指導の工夫をしている傾向がある。

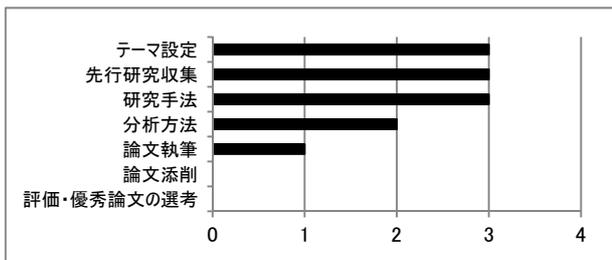


図4 論文指導上工夫している点（修論執筆経験者）

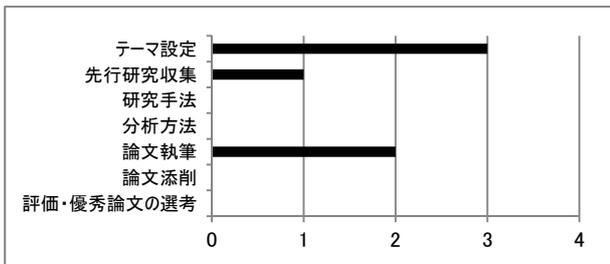


図5 論文指導上工夫している点（修論執筆未経験者）

(2) 考察

①「卒業論文」指導教員が抱える指導上の問題点

論文を書く一連の流れの中で、教員が指導上困難を感じているのは、テーマ設定から研究の手法・分析方法の決定までと最後の評価である。本校では、共通のワークシート型のプリントで生徒の研究をサポートしているので、論理的な文章が書かれているかは別として、ある程度のルールが決定している<sup>(4)</sup>「論文執筆」「論文添削」での困難さを感じていない

と思われる。修論執筆経験がある教員の「論文執筆」「論文添削」で困難さを感じた理由として個別のインタビューをした結果、いかに論理的に文章を書かせるかということで苦勞しており、いわゆる形式的なもので困っているわけではなかった。つまり、より完成度が高い「卒業論文」を求めた結果が反映されていると思われる。

②修士論文執筆経験の有無による指導教員が抱える指導上の問題点の違い

学部の卒業論文と修士論文の違いは当然あり、何よりも学術論文と呼ばれる修士論文に取り組んだ経験は、高等学校の「卒業論文」を指導する教員のスキルに活かされていると考えられる。大学での専攻にもよるだろうが、人文科学系や社会科学系の分野では特に学部の卒業論文と修士論文に差が生じているように感じる。

表1に示したように修論執筆経験者は、指導上困難を感じる項目の数は執筆未経験者より少なく、また、指導上その困難に対して指導の工夫を行っている項目も多い。特に、実際の論文を書く段階の前の課題設定、情報収集、整理・分析のプロセスにおいて、指導の必要を感じ工夫を行っている教員が多い。

整理・分析のプロセスにおいて、指導上困難を感じる教員は、修論執筆未経験者の8割が感じており、また、論文指導上工夫を凝らしている点では、研究手法・分析方法の部分が皆無である。

また、完成した論文添削においても修論執筆未経験者のほうが困難を感じており、どこを修正すべきかがわからないでいる場合が多い。

表1 指導上困難を感じる項目数と工夫の数

	困難を感じる項目数	指導上の工夫の数
修論執筆経験者	2.4 個/人	1.2 個/人
修論執筆未経験者	3.9 個/人	0.6 個/人

3. 指導方法の改善と教員の指導力の向上

より学術論文としての質が高い修士論文執筆経験者のほうが、高等学校の「卒業論文」指導には困難さを感じていないといえる。しかし、困難な項目を

指摘しなかった教員はなく、当然のことながら「卒業論文」の指導方法の改善と教員の指導力向上が求められる。

修論執筆経験がある教員と経験がない教員とでは指導上の工夫をしているか否かで大きな差が生じている。例えば、整理・分析のプロセスにおいて、修論執筆経験者は、ゼミの時間とは別に生徒たちを複数集めグループ討論を行わせるなどして、研究の手法・分析の方法を再度生徒だけで議論させるなどし、実験・実証・論証の方法に多くの時間を割いている。それらの指導方法は各教員の論文執筆経験からもたらされている。

探究型の学習や「卒業論文」のテキストでは、課題設定の重要性が強調されている。本校の教員も課題設定の難しさをよく口にする。しかし、課題設定は、当然のことながら、そのあとに続く情報の収集、整理・分析までの一連のプロセスとしてとらえるべきで、その一連のプロセスに特に教員は指導力向上を目指すべきである。そのためには、指導する教員が学術論文に定期的に取り組み、論文を書く経験値を上げることが指導力向上に直結するであろうが、現場のすべての教員が時間を取れるわけではない。そこで、課題設定から情報の収集、整理・分析までの一連のプロセス、つまり、課題設定と仮説、検証方法を考えることを繰り返し行い、それを教員同士で批評しあうことが効果的であろう。高等学校はさまざまな専門を持つ教員が集まる場でもある。専門分野を問わず、課題設定～分析のプロセスを繰り返すことにより、さまざまな分野に対する知識と分析方法が広がる効果も期待できよう。カリキュラムガイダンスの部分で、教員が生徒と一緒に簡単な課題設定～分析のプロセスを行うのも効果的であろう。

#### 4. おわりに

筆者が本校の「自調自考論文」に携わって6年が経過した。6年前の卒業生が「自調自考論文」のテーマを大学・大学院でさらに追及し、就職もそのテーマを研究できるシンクタンクを選択した。探究型

の学習は生徒に印象に残る経験をさせる。高校で「卒業論文」を課す以上、生徒に適切なサポートを行い、主体的で能動的な学習を促さなければならない。そのためにも教員側の指導方法に改善を期していかなければならない。

#### 注

- (1) 大貫眞弘・竹林和彦(2011)による。
- (2) 桑田(2013)はレポート・論文を書くことによって情報収集力・読解力・要約力・批判的思考力・表現力・課題発見力・論点発想力・情報探索力・情報整理力・課題考察力・論理構成力・文章構成力・自己管理能力がつくとしている。
- (3) 2012年11月に東京大学大学院教育学研究科「イノベーション科研」が実施した公開講座「中等教育における卒業研究カリキュラム—学校図書館サービスを視野に入れて—」などは学校間で指導上の問題を共有するうえで有効な場といえよう。
- (4) 例えば、参考文献の書き方や引用の仕方などは学校全体で統一したものを作り、生徒はそれを利用している。

#### 参考文献

- 大貫眞弘・竹林和彦(2011) 高等学校段階における卒業論文カリキュラムの検討、「早稲田教育評論」第25巻第1号、早稲田大学教育総合研究所
- 川崎剛(2010)『社会科学系のための「優秀論文」作成術—プロの学術論文から卒論まで』勁草書房
- 桑田てるみ編(2012)『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク—6 プロセスで学ぶ』全国学校図書館協議会
- 桑田てるみ編(2013)『学生のレポート・論文作成トレーニング: スキルを学ぶ21のワーク』実教出版
- 酒井聡樹(2006)『これから論文を書く若者のために 大改訂増補版』共立出版
- 酒井聡樹(2013)『これから研究を始める高校生と指導教員のために—研究の進め方・論文の書き方・口頭とポスター発表の仕方—』共立出版
- 鈴木俊裕(2012)『高校生のための「研究」ノート—総合的な学習・課題研究で育む新たな学力』学事出版